

日時：2015年5月28日（木）15:30～17:30

講師：東京大学社会科学研究所 教授 大瀧雅之 先生

演題：On the Limit of Human Cognition: Is Artisanship always Dominated by Profit Motive?

「生き方」という言葉があるように、人間はすべての環境に応じて最大化行動をとっているわけではない。その中からある目標を選び出して、それを最大化していると考えるのが自然である。本報告では、一つの生産経済（production economy）を考え、製品の質に懸かる労苦を勘案しながら最大化する個人を *artisan*、利潤を最大化し質を二義的なものとする個人を *capitalist* と名付け、こうした主体からなる経済の **Evolutionary Stable Set** の一つとして、*capitalist* が完全に淘汰され *artisan* だけが富み栄える状態があることを理論モデルを通じて明らかにするものである。

本報告の問題意識は、現代における効率的な生産活動は、非効率的だがこだわりのある生産活動を淘汰するのか？かつてわが国に多く存在した職人、すなわち、仕事の質と仕事に対する充足感を重要視していた人間 *artisan* は、資本効率を求める *capitalist* に淘汰されるのか？という点にある。

ここでは、自身の効用を認知する能力には限界があり、人間は *artisan/capitalist* いずれか一方の生き方を選択することしかできないという「限定合理性」の前提から、*artisan/capitalist* はそれぞれ異なる対象を自身の効用として認識しているとした。前者は「製品の質」と「得られる利益」の和を、後者は「得られる利益」と「製造コスト」の差を最大化することとなる。

人間が *artisan/capitalist* のいずれか一方の生き方しか選ぶことができない場合、このような「生き方の違い」をモデル化し、進化論的ゲームの枠組みで分析を行うと、**Evolutionary Stable Set** は *artisan* のみの社会(Type. A)もしくは *capitalist* のみの社会(Type. C)のいずれかになるという結果が得られた。加えて、Type. A の効用と Type. C の効用の比較を行うことで、Type. A の社会がパレート優越的であることを論証した。

以上の結果から、現在進行しつつある *capitalist* 量産型の社会ではなく、*artisan* を重んじる社会へと変容していく必要があり、そうした *artisan* を重んじる社会の実現のために、次世代を担う若者に対する教育が求められている。盲目的な利潤追求により職業の均一化が進み、消失しつつある職業の多様化や、仕事の質を追求することで得られる「充足感」をいま一度見つめなおし、その重要性を認識・伝承することこそが我々現世代の義務ではないだろうか、結論づけている。